様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７１１１

研究課題名（和文）批評と小説のあいだ－プルーストと19世紀批評

研究課題名（英文）Between roman and critic - Proust and the critic of nineteenth century

研究代表者
池田　潤（Ikeda, Jun）

白百合女子大学・文学部・講師

研究者番号：９０８００９３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：プルーストの小説『失われた時を求めて』には随所に文学談義がちりばめられており、しばしば「批評的小説」といわれる。ではこの作品はプルーストの批評的意見を反映した小説といいきれるのか。この問いに対し、本研究は、この作品では批評というよりももっと原理的に、文学と人間の関係そのものが主題となっていることを示した。さらに、批評ではサント＝ブーヴを強く批判したプルーストにとって、小説という形式を選ぶことがみずからの批評を乗り越える試みであったことを示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小説も批評も19世紀に完成をみた文学ジャンルである。プルーストの活動時期は19世紀末から20世紀初めであり、むしろこれらの形式が問い直された時代である。プルースト自身、自分が書いているものが小説なのか、あるいは他の何かなのかという問いを抱いていた。現在、『失われた時を求めて』は世界文学における傑作小説とされているが、プルースト自身にはつねに「そもそも小説とは何か」という根源的な問いがあった。本研究はとくにこの作品の「批評的」に傾く側面に注目することで、プルーストにおける小説という言語表現の弁証法をあとづけた。

研究成果の概要（英文）：Proust's roman "In search of lost time" is called a "critical roman" because of its rich references to literature. Is this work, then, a simple and romanesque version of the author's critical opinions? This study clearly showed that the roman regards the critic to be the fundamental link between men and literature. In addition, the study suggested that for Proust, who heavily criticized Sainte-Beuve in the novel, the choice of the romanesque form may have served as a means to overcome his own critics.

研究分野：フランス文学

キーワード：プルースト　失われた時を求めて　サント＝ブーヴ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

マルセル・プルースト（1871-1922）の長編小説『失われた時を求めて』（刊行：1913-1927）はしばしば「批評的小説」といわれる。これは、非常に豊かな文学的レフェランスが散りばめられていることに加え、プルースト本人の文学的な意見表明と考えられる文学論が展開されることに由来する。さらには、この作品が、構想の最初期の段階では『サント＝ブーヴに反論する』という批評作品として執筆されていたことも、『失われた時を求めて』の底流にはプルーストの批評的意見があるという見方を支持するものである。

ただ、『失われた時を求めて』の背後ないし起源に『サント＝ブーヴに反論する』という批評が存在し、実際、小説として完成した作品の随所にそのなごりや痕跡がみとめられるとしても、もともと批評として執筆を開始した作品をプルーストが小説という形式に書き直したことの意義は軽視されるべきではない。それどころか、批評としてかなりの程度の完成度をみていた『サント＝ブーヴに反論する』を放棄してまで小説にきりかえたということは、この作品の本質に関わる問題として論じられるべきであろう。『サント＝ブーヴに反論する』はすでに小説的パッセージを含んだ批評であって（それ自体はもちろん新奇なものというわけではない。プラトンに遡るまでもなく、18 世紀フランスの対話体批評や、イギリスのオスカー・ワイルドの批評など前例はいくつも挙げることができる）、いわば「小説的批評」ともいうべきテクストであった。『失われた時を求めて』を「批評的小説」というのであれば、その先駆形となった「小説的批評」とのあいだの断絶と連続を見定めることはこの小説の特性を論じる上で不可避であると考えられる。

この問題について研究代表者は、『失われた時を求めて』を「文学的教養をめぐる人間喜劇」と説明することで一定の答えを提示した（IKEDA Jun, « La culture littéraire dans *À la recherche du temps perdu* », パリ第４大学ソルボンヌ博士論文、2016 年）。すなわち、批評テクストが基本的には筆者の考えをモノローグ的に語るものであるのに対して、小説ではポリフォニックな語りが可能となる。つまり、小説には語り手や主人公以外の登場人物が配されているのだから、そのそれぞれが自らの文学的意見を口にするという形をとることができる。『失われた時を求めて』は小説という表現形式のこの特性を活かし、文学とどのようにかかわるかということをもって人間描写の一端としているのである。こうしたことは、しかし、どのような小説にも多かれ少なかれ見られることであるが、『失われた時を求めて』が「批評的小説」たりうるのはとりわけ、プルーストが、現代の批評用語でいうところの「受容」にきわめて敏感であり、それを作品に反映させたということによる。すなわち、ある作家についてこの作品で言及されるとき、しばしばその作家の作品だけでなく、その作家について同時代の批評が語っていることまでもが射程に収められているのである。結局のところ『失われた時を求めて』は、単にあれこれの作家についてのプルーストの意見が陳述される作品であるというにとどまらないばかりか、それらの作家について人々がどのように語るかということそれ自体を作品の素材としているのであり、そのことによって、文学と関わりつつ生きる人間のすがたを描いているのだと言える。このような表現がもはや批評という形式では十全に展開できないことは自明であり、プルーストが小説という形式によって、「論述」ではなく「描写」へと舵をきったということの説明たりうる。

この研究の過程で浮かび上がったのは、当然というべきなのかもしれないが、サント＝ブーヴ（1804-1869）の重要性であった。『サント＝ブーヴに反論する』という題の通り（出版されずに破棄されたので題は仮のものであるとしても）、プルーストの批評は全体としてサント＝ブーヴの批評に意を唱えることをめざしていた。この 19 世紀最大の批評家、あるいは批評というジャンル自体の創始者の方法は、一般に「伝記批評」と言われる。プルーストの「反論」の要点は、文学作品を作者から独立したものとしてとらえるということであり、作者の人生やゴシップを、作品を評価する際に考慮するべきではないということであった。

『サント＝ブーヴに反論する』は、ほとんど全面的にサント＝ブーヴを批判、攻撃しており、譲歩のようなものはみあたらない。『失われた時を求めて』でも、サント＝ブーヴを直接に批判するという形はとられていないものの、明らかに『サント＝ブーヴに反論する』から引きうつされた箇所は少なからずあり、「文学創造は社交生活とは無縁のものである」という抽象化されたテーゼは小説のライトモチーフとして繰り返し現れる。

ところが、上記の方法で、『失われた時を求めて』で言及される作家の受容史をあとづけるとき、しばしばプルーストにとってサント＝ブーヴの批評が当該作家の理解に大きく寄与しているということ、そして語り手はむしろサント＝ブーヴの批評に賛同しているということが明らかになった。つまり、『失われた時を求めて』のプルーストは、抽象化されたレベルでは、総論としてサント＝ブーヴの方法に反論しているのだが、個々の作家については、サント＝ブーヴを直接ひきあいには出さない水面下において、この批評家の意見を積極的に受け入れているのである。

これまでプルースト研究では、プルーストが明示的にサント＝ブーヴについて述べている文章を根拠に、この批評家を全面的な批判の対象としてとらえてきた。しかしながら、特定の作家についての個別の議論においては、プルーストがサント＝ブーヴと意見を同じくすることがあるということが明らかになった以上、両者の関係について洗い直す必要があることは明白である。以上が本研究課題の背景である。

２．研究の目的

プルーストとサント＝ブーヴの関係を問い直し、とくに水面下で、プルーストがサント＝ブーヴに関しどのような立場をとっているかを明らかにする。またそれにより、『サント＝ブーヴに反論する』と『失われた時を求めて』の間の、断絶と連続の諸相を明らかにする。

３．研究の方法

これまでのプルースト研究が、あまりにもサント＝ブーヴを看過していたということ、あるいは、『サント＝ブーヴに反論する』の論旨に従ってこの批評家の著作を読んでいたということは否定できない。したがって、サント＝ブーヴの著作、とりわけプルーストがしばしば取り上げる *Causeries du lundi, Nouveaux lundis, Portraits contemporains, Portraits littéraires* をあらためて精読し調査することが有益である。具体的には、i) これらの著作の記述と『サント＝ブーヴに反論する』とをつき合わせ、プルーストが極端に還元主義的な議論をしてはいないかということを検証し、ii) 『失われた時を求めて』で言及される作家についてサント＝ブーヴがどのように論じているかを確認し、プルーストの記述とつき合わせて、両者の見解を比較する、という作業を行った。

４．研究成果

本研究課題の主な成果は次の２点である。i) プルーストによるサント＝ブーヴ批判の要点がその伝記批評の方法にあるとして、そもそもサント＝ブーヴ自身は必ずしも伝記批評に終始しているわけではないということ、ii) 『サント＝ブーヴに反論する』では全面的なサント＝ブーヴ批判が展開されていたのに対し、『失われた時を求めて』の語りは重層的であり、「サント＝ブーヴについてのプルーストの意見」とでもいうものを導くことは妥当ではないと示したこと、である。

i) の点については、サント＝ブーヴの著作をその主要なものだけでも読めば明らかなことであって、「伝記批評の人サント＝ブーヴ」という評価が文学史的な紋切り型に過ぎないということを確認する結果となった。これまでにも同様の指摘はいくつもあるものの、現代においてもなお一般的な文学史においてこの紋切り型が依然強固なものとして残っていることは否定のしようもなく、わが国のみならずフランスにおいてもサント＝ブーヴ研究が未だ開拓の余地を大きく残していることを示唆している。

本研究課題に関連の深いことがらだけをここに述べるならば、サント＝ブーヴの著作のなかでもとくに注目すべきなのは *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire* (『シャトーブリアンとその帝政期文学グループ』、1861 年) であろう。これは 19 世紀フランスの文学に圧倒的な影響を与え、天才という言葉をその身に体現したシャトーブリアンについて、彼と交際のあった人物の回想録や書簡などを手掛かりに、作家の実像にせまるという趣旨の評伝である。伝記批評の方法を十全に駆使した著作であり、それゆえに『サント＝ブーヴに反論する』でまさに激しい批判の対象ともなるが、サント＝ブーヴ自身による序文を読むならば、プルーストの性急さに気付かされもする。すなわち、サント＝ブーヴはゴシップやスキャンダルをあげつらうことでシャトーブリアンを天才の座から引きずり下ろすことを目的としているわけではもちろんなく、むしろ、天才として祭り上げられることで正しい評価が損なわれていると主張する。天才崇拝とも言える時代の傾向に対し、人間としての活動をあとづけることをめざしたのだ。こうした姿勢に対して、「やっかみ」であるとの批判は絶えなかった（プルーストはむしろ、そうした伝統的なサント＝ブーヴ批判を極端におしすすめたともいえる）。しかしながら注意しなければならないのは、サント＝ブーヴは、たしかに時に作家の権威をことさらにおとしめる記述に走ることがあるとしても、まさしくプルーストが批判の要としたような、作家と作品の混同にはきわめて慎重であったということである。たとえばシャトーブリアンに関しては、作家がナイアガラの滝を訪れたということは記録を調査する限りありえないと断定するのだが、それと同時に、大瀑布を前にして抱いた感情についての記述を嘘ということはできないと言い切る。このことから言えるのは、サント＝ブーヴにとって伝記批評とは、作家の実人生の反映を作品のうちに見るためのものではなくて、むしろ、作品がいかに作家から独立したものであるかということを浮き彫りにするための作業であったのではないかということである。そうだとすれば、サント＝ブーヴを批判し、その「伝記批評」に対し作家の「深い自我」とこそむきあうべきだと論じたプルーストの主張は、そもそもサント＝ブーヴが目指したところと重なることになると言えるだろう。

ii) については、i) の成果を精緻化する過程で明らかになったこと、あるいはより正確には、明らかにできなかったことである。すなわち、プルーストの主張が実のところサント＝ブーヴのそれと重なっているとして、そのことをプルースト自身はどの程度意識していたのかということが問題になるが、これについてははっきりとした答えを得ることができなかった。『サント＝ブーヴに反論する』は、客観的に見るならば、サント＝ブーヴという対象をかなりの程度矮小化し、部分を取り上げて批判するという記述になっている。ここにはみずからの批判そのも

のに対する反省的視点はうかがえないが、『失われた時を求めて』はそれとは大きなへだたりがある。この作品では、たしかに主人公である語り手によって、『サント＝ブーヴに反論する』と同趣旨の文学論が提示されもするが、議論は抽象化されており、サント＝ブーヴが直接に名指しで激しく批判されているわけではない。この批評家はもはや、他の多くの作家たちが言及・引用される「文学的曼荼羅」（ロラン・バルト）の中でささやかな一角を占めるにすぎなくなる。

そうした中で注目に値するのは、サント＝ブーヴの名を直接引き合いに出し、まさに『サント＝ブーヴに反論する』でプルーストが批判の対象としていたような伝記批評の理論を口にするヴィルパリジ夫人の存在である。一見すると、この人物は『サント＝ブーヴに反論する』の内容を小説の形で繰り返すための機能を担っているかに思われるし、これまでのプルースト研究でももっぱらそのように扱われてきた。ところが、この人物が言及しているサント＝ブーヴのバルザック論を実際にひもとくと、そこには逆の主張がみとめられるのである。プルーストがこのバルザック論を読んでいたことは確実であるため、この人物の、サント＝ブーヴの代弁者としての性格はプルースト自身によって意図的に歪められているということになる。では、サント＝ブーヴに対するプルーストの立場は、『失われた時を求めて』ではどのように理解するべきなのであろうか。いかにも『サント＝ブーヴに反論する』を小説化したというように構成された場面は、作者自身によって、水面下で歯車を狂わされていたのである。このことからまず最低限言えることは、『失われた時を求めて』は『サント＝ブーヴに反論する』を単純に小説化したものではないということであり、ひいては、サント＝ブーヴに関する主張も変質していると考える余地があるということである。しかしながら、もはや表現の形式は批評から小説へと移っており、「プルーストの意見」というものを明示的に抽出することが妥当ではないこともまた明らかである。むしろ読み取るべきは、表現形式の転換によって、「批評的小説」は「小説的批評」にはない重層性を得たと考えるべきであろう。

本研究課題はプルーストとサント＝ブーヴの関係についての素描を得るにとどまっており、いっそうの発展が望まれる。本研究課題の成果が導いた今後の見通しは次の２つの方向性を持つ。ひとつは、サント＝ブーヴの著作をさらに精読し、各論的にプルーストとの比較を進めることである。もうひとつは総論的な視点に属する。すなわち、サント＝ブーヴが伝記批評を創始した動機が、文学史的にいうならばロマン主義の相対化にあるならば、そのサント＝ブーヴに反論したプルーストはロマン主義に対してどのような位置にあるといえるのかという問題である。プルーストによるサント＝ブーヴ批判が、伝記批評の矮小化された理解に基づくものであることはこれまでに明らかにしたところであるが、この新たな課題は、伝記批評をそのそもそもの起源において問い直しつつ、プルーストをより大きな文学史的流れの中で捉え直す作業を促すだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）

池田　潤「『失われた時を求めて』におけるドン・キホーテ的欲望」「言語・文学研究論集」第18号、白百合女子大学言語・文学研究センター、p. 11-24、2018年。

〔学会発表〕（計　２　件）

①池田　潤「『失われた時を求めて』は『サント＝ブーヴに反論する』の小説版なのか」シンポジウム「引用の文化史：フランス中世から20世紀文学における書き直しの歴史」、白百合女子大学、2018年。

②池田　潤「間テクスト性研究の受容史アプローチ」日本プルースト研究会、名古屋大学、2017年。

〔図書〕（計　１　件）

池田　潤「『失われた時を求めて』は『サント＝ブーヴに反論する』の小説版なのか」篠田　勝英、海老根　龍介、辻川　慶子編『引用の文学史：フランス中世から 20 世紀文学におけるリライトの歴史』、水声社、p. 265-283、2019年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

招待講演　１　件

池田　潤「研究者か、小説読みか－プルーストからの問い」、杉並区立中央図書館市民講座「知の散歩道」、2018 年。

なし

６．研究組織

(1)研究分担者　なし
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者　なし
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。